

雨美



下半身が蛇の凶悪妖怪「濡れ女」。一応、凶悪妖怪のはずだが意外と話が分かる。源のことが大好きで、源に抱かれたがっている。変な薬を飲んだらしく、物騒な状態で登場するが別にヤンデレというわけではない。

源



村の者から一目置かれる狩人。異常な身体能力を持っているらしい。髭伸ばし放題の頑固爺だったはずだが……。雨美の夫のはずなのだが何故か雨美から逃げ回った末、ひなたの家に逃げ込んだ。雨美のことが嫌い(?)

ひなた



久しぶりに好物を食べて気分を良くしていた所で源と雨美の夫婦騒動に巻き込まれる。

不格好な出来映えだが…

「スウウ…」

この磯の香りは…まさしくあの海鮮饅頭の香りだ…。

食べるのはいつ以来か…。

「頂きます…！」



沢山作ったこともあり、この際お行儀が悪いとかは抜きという
気分で、両手にお饅頭を持って大きく口を開き、齧り付いた。



「んむ……ん……んぐ……む……ん……んん！」

母のオリジナルには劣るが口の中いっぱい広がる磯の香りと
旨み……。何より駆け巡るのは、親子三人でこの味を頬張った光景の
ノスタルジィ……。



「……ああ……なつかしいなあ……美味しいよ……お母さん……」

母のより劣るとはいえ、あの味に限りなく近いこの海鮮饅頭。今、私の口中と脳は至福に満たされています……

そして、再び齧り付こうとしたとき……

「……ああ……」

あまりにお饅頭に夢中になっていた私だが、あることを思い出した。




「……あの…源さん？源さんも食べます？美味しいですよ…？」
「……………いらん……」

お客さんが来ていたんだっ…。来たのはお饅頭が蒸しあがる
ちよっと前……。

どんな人かって…？

以前、この辺りの狛師の集まりにお邪魔したときに会ったのが
初対面だったんだけど……。「源さん」って呼ばれてる人で……。





凄く小柄な人なんだけど、凄い髭で、貫禄があるっていうか、凄みがあつて…その凄みも見せ掛けじゃなくて、鉄砲片手に木と木を飛び移りながら、鹿、猪、雉、果ては熊まで一人で軽々狩る超凄腕の狩人なんだそうさ。他の猟師さんからも一目置かれてその軽業から「猿(ましら)の源」なんて異名もつけられてる人…。

集まりでは、集会所の隅でちびちびとお酒を飲んでたりで、あまり他の人と混じらず、寡黙で孤独を好んでいるように見えた。

他の猟師さんによれば、結構怖い人らしい…。

情緒不安定というか…頑固爺という感じらしくて…。


「…むぐむぐ…」

源さんのことを思い出してから、チラチラ源さんを見てしまう…。
少し置いておくだけで、何も構うことはないと言われてるけど…。
気になって気になって…。頑固爺で怖いから…。？…。違う…。
因みに源さんは、うちに来たとき助けを求めるようにやってきた。
そのとき、私は、源さんが源さんだと気が付かなかったわけて…。



……ていうか……この人本当に源さんなの？って今も思ってる……。
逃げるようにうちに転がり込んできて、源さんだって名乗ったけど
…確かに髭と長髪の下は見たこと無かったけど……。頑固爺……爺？
……声も、若くしかつた……。源さんらしさっていったら……。源さん
の猟銃と……髪の色……くらい……かな……？





うちに入ってからは、何かに怯えるように部屋の端で小さくなって
るけど……。そういえば……。源さんが来たとき髭と髪は『剃られた』
って言ってた……。剃った人がいるってことだよね……。？あの源さんが
怯えるような相手……。そんな人……。いるの……？

……。ところで、気になるなあ……。

源さんって……。何歳……？

「……あのお……源さん……つかぬ事をお伺いしますけど……。」

「……なんだ……？」

「……源さん……御歳は……？」

「……さあな…百超えてからは数えとらん…。少なくともお前さんよりは年寄りだよ」

「は…はあ…」

反応に困るジョークを飛ばされた…。

というか、笑うとなんだか可愛いかもしれない…。
源さんのイメージが変わっちゃうな…。
とそのとき…。



玄関から戸を叩く音が聞こえた。またお客さんのようだが、その音に源さんが体をビクツとさせた。

「……あの、ちょっとお客さんみたいなんで、失礼しますね？」

「…待っ…！」

待てと言おうとしたのだろうが、その前に玄関から声が出た。

「こんにちはー！いらっしやいますかー？」

女性の声だ。が、源さんの顔色が明らかに変わった。



「……!……っ!」

口をパクパクさせながら、首を横に振っている。

「……? 源さん……?」

ただならぬ反応に私も何かを感じたのだが……

「すみませーん!」

戸を叩く音が激しくなったものだから……。

「はーい! 今出ます!……あ……」

返事をしてしまった……。

「……………」

「す……すみません……ちょっと出てきます……」

行かざるを得なくなった……。

玄関前まで行き、戸に手をかけ開ける……。

「すみません……お待たせし……!?!」

戸の向こうの光景に私は言葉を失った。

な…!?なに…この人…なんて格好してるの…?胸まで肌蹴た着物に…裸足…
しかも、着物の丈が短く…ミニスカートみたい…。下着はなににもはいてない…
チラチラあそこが見えてる…。

それに…この人…背が高い…。なんか…綺麗な人だけど…やたら威圧感がある。



ん…なに持ってるんだろう…?小瓶…?

「こんにちは！」

「あ…はい…こんにちは…」

なんだか…やたらテンションが高い…？なんか…いやな予感が…。

「あ…あの…なに持ってるんです…？その瓶…」

いやな予感から相手のペースに飲まれまいと思い、先に質問を投げかけた。



「……ああ、これ？……私がちよつと作ってみたんだけどね？効果あるわね……
原液のまま飲んでみたの……そしたら……熱くなつてね……なんか……ふふ……」
「い……いや……だから……なんなんですか……？」



「び・や・く。媚薬、興奮剤かしらね」

「……は……？」

「うふふ……夫にね……飲んでもらおうかと思って、持ってるの……」

「あの……えと……」

話についていけない……

「私が飲んで、こんなに熱くなるんですもの……夫が……あの人が

飲めば……ふふふ……」



「きつと……ううん……絶対私のこと……犯しまくってくれるわ……。」

それで……あの人の子を孕んで……ふふ……絶対可愛い子が

産まれる……絶対……ふふふふ……」

「……………」

なんか……やばい……？」



「伸びてた毛もこっそり剃って準備万端、後はこれを飲ませたら、
ってところだったのに……なんで逃げちゃうのかしらねえ……」
欲望のままに、私のことを抱いてくれていいのだから……」

……詳しいことはよく分からんけど……このままこの人の前に
いるのは非常に危険かと思えます……。というわけで、こっそり
逃げよう……。





「あああああ……抱かれない……あの人に抱かれない……それで……私の中に……あの人の濃いのを……ふふふふ……そうよ……昔はあんなに愛しあったのに……それなのに……ふふふ……私のせいで……そおーつと……抜き足……差し足で……家の中に戻ろう……」

この人が独り言に夢中なうちに……そつと……

「待てよ」

「ひえっ!？」

ば…ばれた…振り向くと…ものすごく怖い顔が……。

「あ…あの……」

「まだ用件がすんでないでしょう……?なんで逃げたの……?」

「いえ…!逃げたわけじゃ……」



「やましいいことでもあるのかなあ……？」

「いや、そんなことないですよ！」

葉のせいなのか……この人の素なのかは定かじやないけど……滅茶苦茶怖い……！

「ちよつと待ってちよつと待って……私考えるから……！」

「……え？」

「……………」

「……………あ……………」

「？」



「あんだ、私からあの人……奪うつもり……？」

「へえ!？」

何のことはさっぱり分からないけど……目つきが明らかにヤバイことになってる……。

「違います違います!そもそも何のことも分かりませんし……!」

「だってさ……ここに居るのは分かってるもの……それに……あんだ……

さつきから挙動不審……なに……ヤツたの……?」

ヤツたことなんて一度も無いわ!というか……どうにか誤解を解かないと……。

「!？」



「……………」

ものすごく鋭い眼光がこつちを睨んでいた。

「あ…あの…」

「……………さない……………」

「は…?」

「許さない!」

「!」

そう叫んだのと同時に、手に持っていた瓶が握りつぶされた。
そして、私の体は突風に吹かれたかのように後方に弾かれた。



そして、蛇の尾の上にはさっきの女性が……。

「あ……あわわ……」

よ……妖怪……!?……ラ……ラミア!?いや……妖怪なら……濡れ女!?

日本妖怪でも危険な悪妖怪として知名度も高い……。

人を喰らうともいわれて……その濡れ女が私の目の前に……。

「わ……わわ……わあああ!」

濡れ女の口元からは蛇のように先で分かれた舌が伸びていた。



「フーツ……フーツ……」

怒りで興奮しているのか、濡れ女が激しく息をしながらこちらを睨んでいる。……！そうだ……誤解を解かなくちゃ……このままじゃ殺されちゃう……！

「誤解……誤解なんです！」

「……何がだ……」

「私、あなたの旦那さんなんて知りませんし、不倫なんてしません！」

「……………」

「お願い……！通じて……！」

「が……そのとき後ろから……」



「あ……！こら！何してるんだ！雨美！その人に危害を加えるな！」
私の悲鳴を聞いてか源さんがやってきた。

……あれ……知り合い……？ていうか……まさか……旦那さんって……

「……源……！」

濡れ女……名は雨美(あまみ)というらしい。雨美は源さんの姿を見ると、表情を和らげ、乙女のような表情になった。

これで治まる……そう思ったのだが……



「なんだ…なんだよ…やっぱりいるじゃないか…知らない

ところか…お前の家から出てきたじゃないか…！」

雨美は涙目で再び私のことを睨んできた…。

「い、いやそれは…！」

「源…その女のほうがいいのか…？私のことを恨んでるのか…？」

憎んでるのか…？私のこと…嫌い…？」

「……………」

なんで源さん黙っちゃうの!?誤解を解かないと…！」



「だったら……だったら！こんな女八つ裂きにしてやる！」
「！っうわ！」

驚くのとほぼ同時に、私はまた吹き飛ばされた、地面に青天状態になり、そのまま雨美が覆いかぶさってきた。

「ば、ばか！やめんか！」

源さんが叫ぶも……

